近代と／へのノスタルジー

――近代化遺産と昭和ブーム――

高　岡　文　章

0．はじめに

本稿の課題は，近代化遺産と昭和ブームを題材として，「近代という過去」へと向けられるノスタルジーについて考察することである。ノスタルジーとは過去の時代に対して社会や個人が感じる思慕や回顧の念である。従来，ノスタルジーは主として近代以前の「過去」や「伝統」を対象とする概念であった。近年の歴史研究は，ノスタルジーが近代の国民国家システムのなかで，共同体の紐帯に資源を提供するものとして「発明」され，歌や小説，映画などのメディア消費を通じて社会に流通するプロセスを明らかにしてきた。

他方，近代社会の産物であるはずのノスタルジーが，近代という時代そのものへと向けられつつある。近代化を一つの「過去」ととらえ，関連する遺構や建築物を遺産として保存する「近代化遺産」や，映画「ALWAYS 三丁目の夕日」のヒットや「豊後高田 昭和の町」の人気にあらわれる昭和ブームなどがそれである。

誰が，なぜ，どのように，何を回顧するのか。本稿ではノスタルジーの考察を通じて，現代社会における「歴史」の意味を探る。

1．近代化とノスタルジー

「新しい技術が古いものに終りを告知したとき，古いものが初めて詩的な姿をとり始める」（シヴェルブシュ，1982：229）。シヴェルブシュが端的に述べたように，ノスタルジーとは過ぎ去りしものに対して抱かれる「詩的」な感覚のことである。人は廃墟やふるさと，失われつつあるもの，今はなきものに対し，哀惜の情を感じる。このような感覚は決して新しいものではないが，それが社会全般に共有されるようになるのは近代以降のことである。このことについては，いくつかの説明が可能であろう。

シヴェルブシュは，鉄道という「新しい技術」が「古風な叙情性に終止符を打つ」とし，鉄道以前の徒歩や馬車での旅が鉄道の登場によって根底的に変容したことを指摘している。徒歩や馬車による「失われた旅」は，19世紀から20世紀にかけ，小説や詩，論評などにおいて哀感をもって回顧された。例えばトマス・ド・クインシは，馬車の速さは「いとも高貴な獣の燃える眼に，ふくらんだ鼻孔に，筋肉の躍動に，その鳴り渡る蹄のなかに生きていた」が，移動におけるそのような人間と自然の一体性は，鉄道という「われわれとは縁もゆかりもない盲目で無感覚な力の所産」によって遮断されてしまうと嘆いた（シヴェルブシュ，1982：16）。ラスキンもまた鉄道以前の旅への郷愁を隠さない。かつての旅人はゆっくりと時間をかけて「岡を越えたり，生垣の間を通って」旅をしていた。ところが鉄道旅行には「美的感覚が欠如」しており，それは「人間を旅人から生きた小荷物」（ラスキン，1930：179-180，一部改訳）に変えてしまった。

失われたのは旅行における人間の主体性や人間と自然との豊かな関係だけではない。ベンヤミンによれば，技術的に複製された作品は「芸術作品のもつ〈いまーここ〉的性質 ── それが存在する場所に，一回的に在るという性質」（ベンヤミン，1995：588）を欠いている。複製技術という「新しい技術」が芸術作品のアウラを衰退させ，「文化遺産における伝統価値を清算する」（ベンヤミン，1995：590）。近代という新しい時代が技術の革新をもた

らす傍らで，芸術作品のオリジナルさや真正さの概念（の不在）が見出され，回顧される。

憧憬の対象は時間的なものであると同時に空間的でもあり，ノスタルジーは生地＝故郷と結びつけられる。遣唐使阿倍仲麻呂が唐の地で詠んだ句「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」は，故郷を偲ぶ感情が古くから見られることを示している。しかし，このような感情は誰もが持てるものではなかった。日本において農村から都市への人口移動が一般化するのは大正期以降のことである。遣唐使などの特権階級とは縁遠い，たとえば石川啄木のような詩人が「ふるさとの訛りなつかし停車場の人込みの中にそを聞きに行く」と詠うことができたのは，鉄道が開通し，都市部の労働力需要が高まり，生誕の地を離れるという人生経験が人びとの間に広く共有されていたからにほかならない。

ただし，人が故郷を離れ都市へと移住することは，そのまま「ノスタルジー＝郷愁」の誕生を意味するわけではない。なぜなら，そもそも故郷は決して美しいものではあり得なかった。人は豊かさを求めて貧しい農村を捨て，しがらみと束縛に嫌気がさして村落共同体をあとにした[1]。貧しさや停滞の象徴である農村が「美しき風景」へと変容するためには，一定の操作が必要となる。

成田は1880年代における同郷会の結成や1930年代における郷土教育や郷土史研究の発展，民謡や新民謡の流行などを通じて，都市空間のなかで「故郷」が構築されたと指摘する（成田，1998；2000）。荒山は新日本八景や国立公園の制定を通じて，近代日本における風景観が生成したことを明らかにする（荒山，1998；2003；2004）。これらの歴史研究は，農村や山岳地域が従来から「故郷」や「景勝地」であり続けてきたのではなく，理想的な場所として「創造＝想像」されてきたという事実に注意を向けさせる。

1) 戦後になっても，生活難からの家出は一般的な現象であった（安井，2000）。また，啄木には先に引用したものの他に「石をもて追はるるごとくふるさとを出でしかなしみ消ゆる時なし」の句もある。

「故郷」の構築は，言うまでもなくナショナリズムとの間に高い親和性を持つ。近代国民国家という人工的な共同体は，民衆を「国民化」し，国民の紐帯を強めるため，神話や伝説，歴史など共通の物語をその資源として要求する。過去に対する共通認識や共有感情こそが国家という「想像の共同体」（B. アンダーソン）の基盤となる。郷土や故郷が仮構され，ノスタルジーが創造される。「美しい農村」や「田園風景」は，「美しい国土」の補強材となり，愛郷心は愛国心へと直接に結びつけられる（成田，1998）。

ノスタルジーは，近代における「不安」のネガでもある。テイラーによれば，近代社会には，個人主義という近代的自由がもたらす意味や道徳の喪失，道具的理性がもたらす非人格的メカニズム，産業-テクノロジー社会の制度と構造がもたらす市民意識や政治的参加の後退，という三つの不安が内在している。テイラー自身は，これらの不安を充足させるために近代の果実を捨て去るのではなく，「近代の発展をそのもっともすばらしい約束に向けて推し進め，卑しむべき形態へと失墜しないようにする」べきだと考えている。しかし実際にはこの不安に安定的な基盤を与えるべく，ノスタルジーが召還される。だからこそ，疎外論や物象化論など近代批判の思想はすべからくギリシャ・ローマや中世からさまざまな資源を調達してくる。

すでに明らかなように，ノスタルジーは「始原の場所」に対する感情ではない。ノスタルジーという感覚そのものが「始原の場所」を事後的に構築するのだ。東京に生まれ育った小林秀雄が「自分には故郷というものがない」（小林，2003［1933］）と述べ，萩原朔太郎が「僕等は一切の物を喪失」し，「西洋は僕等にとっての故郷であつた」（萩原，1960［1938］）と言い切るのは，彼等にとって本来的な安寧の場所がすでに失われているからである[2)]。

まとめよう。ノスタルジーは近代社会の産物である。近代以前にも望郷の念は存在したが，それが社会に広く共有されるのは近代以降のことである。

---

2) だからこそ，1970年から国鉄が開始した「ディスカバー・ジャパン・キャンペーン」において日本は「ディスカバー＝発見」されなければならなかったのであり，竹下登内閣の「ふるさと創生事業」においてふるさとは「創生」されなければならなかった。

ノスタルジーという感情／現象は近代以降に出現するだけでなく，近代社会の存立構造そのものと分かち難く結びついている。新しい技術の発明，都市化と産業化，国民国家とナショナリズムの誕生，近代特有の不安が，ノスタルジーを不可避的に招来する。

2．近代化遺産とまちづくり

近代社会の産物であるノスタルジーはしかし，近代そのものに対しても向けられる。本章では，近代化遺産を取り上げてこのことを確認しよう。

近年，観光研究や都市計画，環境学，建築学などの分野において，「近代化遺産」という概念が注目を集めている。近代化遺産とは，産業化遺産や近代産業遺産とも呼ばれ，明治期以降の社会の近代化を支えた土木，建築，農業，工業，金融，軍事，教育関係の遺構のことである。具体的には駅舎，SL鉄道，鉄橋，灯台，港，ダム，堤防，炭鉱，工場，要塞，砲台，市庁舎，公会堂，学校，教会，病院，ホテル，旅館，銀行などを指す。

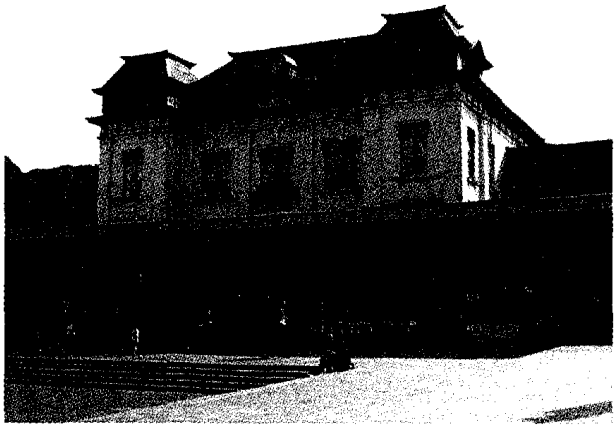
従来，学術用語としても政策用語としても，文化遺産という概念は，古代遺跡などと関連する「古いもの」としてとらえられてきた。したがって，近代化遺産の保存運動が起こった場合でも，「遺産というには新しすぎる」という理由で保護政策の対象からは除かれてきた。ところが，1970年代から重工業が停滞し，炭鉱や工場が閉鎖され跡地にテーマパークが建設され始める。「近代化＝工業化の時代」が終焉し，「近代」が過去のものとなったとき，過ぎ去り行く近代へのノスタルジーが生まれる。近代という時代が歴史化され，産業・土木・交通に関連する施設が，近代を後世に伝えるための「遺産」となる。おりしも1970年代から，急速な国土開発により失われる歴史的景観や建築物を保存するべく，住民運動や専門家による提言が活発に行なわれ，それらの動きは古都保存法や重要伝統的建造物群保存地区制度などの形で法制化されていた。先述の通り歴史的遺産保存行政のなかで近代化遺産への施策は遅れたが，文化庁は1993年になってようやく重要文化財の新たな種

別として「近代化遺産」という概念を定式化し政策対象の範疇に加えることになった。

日本を代表する近代都市である東京では，東京駅駅舎や明治生命館，日本銀行本店本館，三井本館，第一生命館など近代建築史を代表する重厚な建築物が震災や戦禍を免れて残されており，行政による保護を受けている。また，同潤会アパートや復興小学校，銭湯，交番など生活に根ざした建築物にも注目が寄せられている。これらの建築物は，いまでは明治・大正期における近代化を偲ばせ，その記憶を目に見える形で保存する貴重な文化遺産として広く親しまれている。

東京駅

近代化遺産再評価の動きは，地域社会にいま，新たな活力を与えようとしている。日本各地でダムや発電所や炭鉱施設などの産業施設を地域のシンボルとして保存し，観光資源として活用する動きが活発になっている。モノづくりの集積地がある東海地区では他地域に先駆けて産業観光に取り組み，博物館を開設し，ガイドブック『るるぶ 産業観光に行こう』を出版するなど積極的な活動を行っている。町工場が多く残る東京都大田区では，地域の工場を紹介するマップやインターネットサイトを作成し，「職人の町」として売り出している。


門司港駅

九州は鉱物資源に恵まれ，大陸との距離も近いため明治期以降さまざまな産業施設が建設された。また長らく経済な苦境のなかにあったため開発が遅れ，結果としてそれらの施設が比較的良好な状態で残されてい

る。いまではそれらが重要な地域シンボル／観光資源として注目を集めているのである。特に北九州市門司区の門司港レトロ地区は1995年，北九州市「門司港レトロめぐり・海峡めぐり推進事業」のもと，観光開発がなされた。明治・大正時代の門司港の繁栄を今に伝える近代建築物を核として，それらと調和するような建築物を移設・建設し，「レトロ」な雰囲気づくりを試みている。また，軍艦島として知られる長崎県端島炭鉱は廃墟ブームの象徴的な場所として人気を集め，全国から訪問者が絶えない。地元では軍艦島の世界遺産登録を目指す活動が進められている。

日本において近代化遺産が評価され活用されているのとは対照的に，韓国の事情は大きく異なる。韓国にも日本で言うところの近代化遺産は残存しているが，それらを遺産として保存する気運は乏しい。というのも，韓国における社会の近代化は，その多くの部分が「日本帝国主義」による侵略の歴史に重ねられる。実際，ソウルに残る近代建築の多くは日本の資本や日本の建築家によって建てられている。朝鮮王朝時代の象徴である景福宮の前面に立ちはだかり，新たな支配者の権力を示すようにして1926年に建設された旧朝鮮総督府は，建築学的に高い評価を受ける建物であった。しかし独立から50年目にあたる1995年８月15日に取り壊しが開始され，跡地には日本によって破壊された景福宮が部分的に復元されている。

ソウル駅

現在のソウルには韓国銀行本店（辰野金吾の作）や旧ソウル駅，ソウル市庁舎など日本人の手による建築物が残されている[3)]。しかし，建物の案内板

3) 筆者は2005年12月にソウルで現地調査を行った。現在も残る近代建築を訪れ，現状，使途，案内板，文献等について調べた。その成果については高岡・佐島（2006）を参照のこと。

にはそれが日本人の手によるものであることは記されていても，その建築学上の意義や審美的な価値については言及されていない。また，大手の書店にも日本のように近代建築に対するロマンティックな感覚を喚起するような書物は目につかない。韓国では現在のところ，日本で見られるような近代化に対するノスタルジーは見られない。

日本における近代化と韓国における近代化とは，その意味づけが全く異なることが明確となった。日本のそれは「輝かしき過去」として表出し，韓国のそれは「忌まわしき過去」として退けられる。歴史は常に選択的であり，恣意的であり，それゆえ政治的である。日本における近代化遺産評価の高まりは，その政治的布置関係との関連のなかで考察されなければならない。

3．昭和レトロブーム

近年，「昭和」とりわけ昭和30年代が消費の対象として注目されている。本章ではいわゆる「昭和ブーム」について概観する。

豊後高田 昭和の町

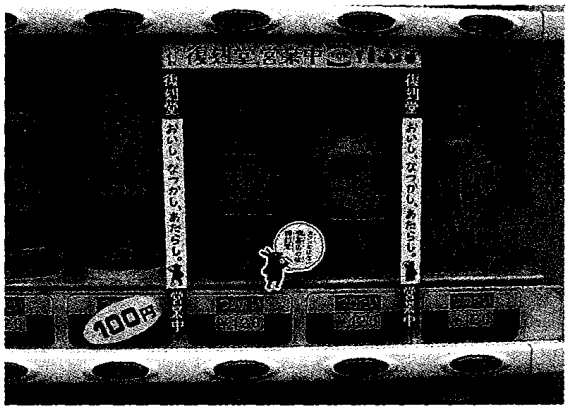
大分県豊後高田市は，幹線道路からはずれたため町全体が開発から取り残された。開発の遅れを逆手に取り，昔ながらの風情が色濃く残された商店街を「昭和の町」として売り出し成功を遂げた。2002年にオープンした駄菓子屋の夢博物館では，「昭和」や「レトロ」をテーマに設計した館内にぬりえ人形やセルロイド玩具など，昭和のおもちゃ5万点以上を展示している。昭和の絵本美術館では画家・黒崎義介のノスタルジックな童画を展示している。昭和20年代から40年代に建てられた店が並ぶ商店街では，看板をレトロ調にし，店先には昭和30年代を連想させるポスター，電化製品，家具を並べた。地元の住民がボランティアで町を案内する「ご案内人制度」を実施し，人気

を集めている。福岡市や北九州市などの大都市圏からのアクセスは決して良好とは言えないものの，現在では休日ともなると多くの観光客が訪れるようになっている。

昭和を代表する大型観光地として知られる別府では，社員旅行などをあてにする従来型の大衆観光が伸び悩んでいる。近年では発想を転換し，全盛期の名残を残す路地を地元ガイドが案内する「別府八湯ウォーク」が行われ，新たな観光イベントとなっている。アコーディオンやギターの演奏を伴ってネオン街を練り歩く「竹瓦夜の路地裏散歩」や，「浜脇温泉セピア色散歩」「山の手レトロ散歩」などのコースが設定されている。ここでも「昭和」や「レトロ」が観光における重要な資源となっている。

門司港レトロ地区においても，整備された当初は駅舎や商船三井ビル，旧門司税関など明治・大正期の建築が主要な資源であったが，近年では商店街「栄町銀天街」など，地域に残る昭和の名残にも注目が集まっている。

また，マンガ「三丁目の夕日」を映画化した「ALWAYS 三丁目の夕日」（2005年公開）が昭和33年の東京の町並みと暮らしを忠実に再現し，大ヒットを記録した。「地下鉄（メトロ）に乗って」など同系統の映画が続いて製作されている。



ダイドードリンコ「復刻堂シリーズ」

飲料メーカーのダイドードリンコは2004年よりフルーツオレ，ガラナ，ミルクセーキなどの「復刻堂シリーズ」を発売し好評を博している。これらの飲料水は昭和時代における銭湯の記憶と重ねられる。また江崎グリコは「タイムスリップグリコ」を発売し，「青春のメドレーチョコレート」や「大阪万博編」「クループサウンズ編」「思い出のマガジン」など多くのレトロ商品を送り出す。

以上の現象はまとめて「昭和ブーム」や「昭和30年代ブーム」として注目

され，メディアに頻繁に取り上げられている[4]。昭和30年代とは，戦後の復興が一段落し，社会が高度成長の上昇曲線を描きはじめた時代である。昭和33年（1958年）は，長嶋茂雄が巨人軍に入団し，東京タワーが完成する。皇太子（当時）の婚約が発表され，ミッチーブームが沸き起こる。1964年の東京オリンピックへ向け，交通網が整備され，大型ホテルが林立し，空き地はビルに代わり，長屋は団地へと変貌する。かつての風景は失われ，代わって手塚治虫が予言的に描いたようなメガロシティが現実のものとなった。誰もが夢を持ち，昨日よりも今日が，今日よりも明日が豊かで幸せであると感じていた，と回顧される。この時期に少年時代を過ごしたいわゆる「団塊の世代」が定年退職を控え，自らの人生を振り返りはじめたいま，昭和30年代が「古き良き時代」として格好の消費対象となっている。

4．歴史化する空間

豊後高田，別府，門司港など実在の街がレトロな空間へと再編される一方で，何もない場所に新たに「歴史的な空間」が創出する例も見られる。本章では，ノスタルジーが物語や感覚としてだけではなく，空間的に現れる事例を取り上げよう。

1965年にオープンし，日本で最も古いテーマパークの一つと言える愛知県犬山市の博物館明治村では，札幌電話交換局，森鴎外・夏目漱石住宅，帝国ホテル中央玄関（ライト館）をはじめ，全国各地にある明治期の建築物が移設され，明治をテーマとするテーマパークとなっている。本来の場所に立地することが難しくなった建築物を一同に集め建築博物館として一般公開するというコンセプトは，長崎のグラバー園，岐阜の日本大正村や日本昭和村，東京たてもの園などに引き継がれている。これらのテーマパークは，単に重要な建築物を保存展示するだけでなく，グラバー園「ファンタジア」や明治

4) 朝日新聞 2005 年 11 月 7 日朝刊，朝日新聞 2006 年 10 月 4 日朝刊など。また，切通（2006）も参照のこと。

村「百年前体験博」など明治時代へのノスタルジーをテーマとするイベントを実施し，蒸気機関車や市電や馬車を走らせ，洋食店ではコロッケ，カレーパン，牛鍋，デンキブランなどの「ハイカラ」なメニューを出すなど，園内全体をレトロな空間として編成している。

また，新横浜ラーメン博物館，熊本ラーメン城下町，東京駅黒塀横丁，池袋福袋餃子自慢商店街，中部国際空港ちょうちん横丁，大阪滝見小路などの飲食店街やフードテーマパークでは，昭和レトロや大正ロマンをモチーフとする空間設計がなされている。なかには食品をテーマとするのではなく，台場一丁目商店街や道頓堀極楽商店街などのように昭和や大正という「古き良き時代」そのものが中心テーマとなるテーマタウンも見られる。

中部国際空港 ちょうちん横丁

5．おわりに ── ポストモダンとノスタルジー消費

これまで見てきたような博物館やテーマパークにおける動向は，作り手／送り手の意図や戦略という側面からのみ理解することはできない。それらは当然のことながら，それを受容する消費者の感受性と連動している。本稿の締め括りとして，本章では「われわれはなぜ，過去へのノスタルジーを抱くのか」という本質的な問いについて若干の考察を加えておく。

先述した「復刻堂シリーズ」を販売するダイドードリンコの担当者は，商品が団塊の世代つまり昭和30年代に銭湯で実際にフルーツ牛乳を飲んでいた人びとだけでなく，あらゆる年齢層をターゲットとして想定しており，現に幅広い層に受け容れられていると述べる（朝日新聞11月７日朝刊）。当時を知らない者がなぜ，回顧的商品を手に取るのだろうか。

大塚（1992）はアニメ「ちびまる子ちゃん」が主婦にも小学生にもノスタ

ルジーを感じさせるのは，それが厳密な時代設定に準拠することなく，「〈懐かしいあの頃〉というフィクショナルな過去」を呈示しているからであると指摘する。彼は「80年代半ばの時代にあって，人々はとにかくめったやたらと回想すべき対象を求めてやまなかった」とし，植木等や懐メロ，白黒映画のリバイバル／リメイクブームの存在に注目する。人が「架空の過去」や「万人向けのノスタルジー」に依拠してしまうのは，「自分たちの中にある時間＝歴史をとらえる感覚や技術が大きく衰弱している」からである。「人が自分の過去の体験を語ることがほとんど不可能になってしまった時代」においては，「他人のノスタルジーを購入」するしかないということになる。

大塚の洞察は，ポストモダンについての代表的な理論家フレドリック・ジェイムソンの議論を思い起こさせる。彼によれば，マス・メディアは時間を断片化し，われわれを歴史的記憶喪失へと追いやっている。それゆえ，われわれは歴史的過去を，過去についてわれわれ自身がもつポップなイメージやステレオタイプを通してしか見ることができず，過去それ自体は永久にわれわれの手の届かないところにある。自身の現在の経験を美的に表象することが不能となり，自身の現在に焦点を定めることも不可能となっている。したがって回顧のまなざしは過去そのものではなく，「いつと限定しがたいようなノスタルジックな過去」や「過去の感触」へと向けられることとなる。

このようなノスタルジー消費の様態は，実はディズニーランドにおいていち早く実現されている。ディズニーランドでは，中世ヨーロッパ風の城がそびえ，ウエスタン調や20世紀初頭のアメリカを彷彿とさせる建物が立ち並ぶ。ディズニーランドを訪れる者は，たとえアメリカ人であろうとなかろうと，アメリカ的ノスタルジーを享受することになる。「他人のノスタルジー」を消費する感性にとっては，未来をテーマとするトゥモローランドすらも，もはや懐かしく感じられることだろう[5]。京都や鎌倉などの「古都」に（明治期以降に誕生した）人力車が走り，昔風の交番や公衆便所があるのを見て違

5) 同じ理由で，「進歩」や「科学」をテーマとする大阪万博も，今では「タイムスリップグリコ」の一シリーズとしてノスタルジーの対象となっている。

和感を覚えないばかりか，むしろそこに調和を感じ取ってしまうのは，「古都」が平安時代や鎌倉時代など特定の歴史的過去を彷彿とさせるのではなく，漠然としたノスタルジーを喚起する場所となっているからにほかならない。京都という土地での消費行為（その多くは観光とかかわるものであるが）は，空間全体をある種のテーマパークとして見立てることで，より明確に理解できるようになる。

現代社会において，もはや「歴史」は商品である。ノスタルジーは，過去に対する感覚のあり方というよりは，「歴史」という商品を消費する際の一つの形態に過ぎない。そこでは，「ノスタルジーの対象が近代以前なのか，それとも近代そのものなのか」という本稿の前提そのものまでもが，なしくずしになるだろう。

参考文献一覧

荒山正彦，1998，「自然の風景地へのまなざし」荒山正彦・大城直樹編，『空間から場所へ ── 地理学的想像力の探求』古今書院.

荒山正彦，2003，「風景のローカリズム ── 郷土をつくりあげる運動」「郷土」研究会編，『郷土 ── 表象と実践』嵯峨野書院.

荒山正彦，2004，「近代日本における風景論の系譜」松原隆一郎・荒山正彦・佐藤健二・若林幹夫・安彦一恵，『〈景観〉を再考する』青弓社.

ベンヤミン，W.（浅井健二郎編訳），1995，「複製技術時代の芸術作品」『ベンヤミン・コレクション1 ── 近代の意味』筑摩書房.

デーヴィス，F.（間場寿一・荻野美穂・細辻恵子訳），1990，『ノスタルジアの社会学』世界思想社.

藤田弘夫，1993，『都市の論理 ── 権力はなぜ都市を必要とするか』中央公論社.

萩原朔太郎，1960［1938］，「日本への回帰 ── 我が獨り歌へるうた」『萩原朔太郎全集第4巻』新潮社.

伊東孝，2000，『日本の近代化遺産』岩波書店.

ジェイムソン，F.，1987，「ポストモダニズムと消費社会」H. フォスター編（室井尚・吉岡洋訳），『反美学 ── ポストモダンの諸相』勁草書房.

川森博司, 1996,「ノスタルジアと伝統文化の再構成 ── 遠野の民話観光」山下晋司編,『観光人類学』新曜社.
切通理作, 2006,「昭和ブームを支えるヴァーチャルな懐かしさ」『中央公論』中央公論社, 2006年7月号.
小林秀雄, 2003［1933］,「故郷を失った文学」『小林秀雄全作品4 Xへの手紙』新潮社.
ラスキン, J.（高橋松川訳）, 1930,『建築の七灯』岩波書店.
森めぐみ, 2003,『東京遺産 ── 保存から再生・活用へ』岩波書店.
成田龍一, 1998,『「故郷」という物語 ── 都市空間の歴史学』吉川弘文館.
成田龍一, 2000,「都市空間と『故郷』」成田龍一・藤井淑禎・安井眞奈美・内田隆三・岩田重則,『故郷の喪失と再生』青弓社.
西牟田靖, 2005,『僕の見た「大日本帝国」── 教わらなかった歴史と出会う旅』情報出版局センター.
西牟田靖, 2006,『写真で読む僕の見た「大日本帝国」』情報出版局センター.
大塚英志, 1992,『仮想現実批評 ── 消費社会は終わらない』新曜社.
シヴェルブシュ, W.（加藤二郎訳）, 1982,『鉄道旅行の歴史 ── 19世紀における空間と時間の工業化』法政大学出版局.
砂田光紀, 2005,『九州遺産 ── 近現代遺産編101』弦書房.
高岡文章・佐島顕子, 2006,「『近代化遺産』をめぐる位置づけの日韓比較」2005年度福岡女学院大学大学教育研究特別申請（傾斜配分）成果報告書.
テイラー, C.（田中智彦訳）, 2004,『〈ほんもの〉という倫理 ── 近代とその不安』産業図書.
内田隆三, 2002,『国土論』筑摩書房.
矢作弘, 2004,『産業遺産とまちづくり』学芸出版社.
柳田国男, 1967［1931］,『明治大正史世相篇』平凡社.
安井眞奈美, 2000,「消費される『ふるさと』」成田龍一・藤井淑禎・安井眞奈美・内田隆三・岩田重則,『故郷の喪失と再生』青弓社.
四方田犬彦, 2006,『「かわいい」論』筑摩書房.
財団法人北九州都市協会, 1996,『海峡の街・門司港レトロ物語』財団法人北九州都市協会.